

1997年7月11日発行



Web版

CONTENTS

- 開館満一年の日に
土屋文明記念文学館長 伊藤信吉
- 伊藤信吉館長の懐かしさ 中村真一郎
- 土屋文明と群馬の精神風土 中村 稔
- 伊藤信吉先生のこと 萩原葉子
- 父のふるさとの地に 小市草子
- 文学館で会いましょう 荒川洋治
- 啄木の日記から 司 修
- 開館までの歩み

群馬県立
土屋文明記念文学館

文学館通信

土屋文明記念文学館報

1997年7月11日

発行／土屋文明記念文学館

〒370-3533 群馬郡群馬町保渡田 2000

電話 027-373-7721 FAX 027-373-7725

Vol 1

開館満一年の日に

土屋文明記念文学館館長 伊藤信吉

標高一、四四八メートル。山上湖のある榛名山を
ずつと南東面へ下った山麓の群馬町。歌人土屋文明
生地このあたりは、眺望がひろくやさしく美しい。
ここへ「未来へ語り継ぐ文学があります。」の語を掲
げて県立文学館が開設されてからこの六月でまる一
年。この間にお迎えした来館者およそ五万人。交通
の便がよくないのに、よくぞお出で下さったと館員
一同よろこんでます。土屋文明記念文学館という名
称ではあっても、来館は短歌関係ばかりでなく、文
化・文学全般にわたっているのです、このことも私ど
も館員への励ましとなっています。

文学的郷土自慢になるけれど、群馬を生地とする
者として、東毛の館林に作家田山花袋、県央の前橋
地域に萩原朔太郎、高橋元吉、萩原恭次郎らの詩人
があり、群馬町の山村暮鳥、安中磯部町の大手拓次
は西毛の詩人。高崎の俳人村上鬼城、詩人岡田刀水
士。北毛出身の作家・翻訳家の佐藤緑葉。「語り継ぐ

文学」は、一つにはこれらの人たちが残した遺産継
承ということ。また一つには県外の方々と、群馬の
地に親しみ、すぐれた作品を残した方々の業績継承
ということでもあります。それを少しでも挙げれば、
赤城山の志賀直哉、高村光太郎、伊香保の徳富蘆花、
木下尚江、榛名の竹久夢二があり、室生犀星、草野
心平の二人は数多くの上州題材の詩を残してくれま
した。

粗雑な文学案内めいてしまつて恐縮ながら、こう
いう遺産・伝統と共に、ひろく近代・現代の作家た
ちの業績を収蔵し展示したい考え、踏み出しの一年
を経過したとはいえ、現状には多くの不備、欠落、
欠陥があります。これを埋めることをも同時的な課
題とし、第二年目に歩み入ります。

文学館報としての第一信。御寄稿下さった皆さま
に御礼申します。



伊藤信吉館長の懐しさ

中村真一郎

伊藤信吉さんは、私には特別に親しい感じの先輩の詩人である。

最初に私のなかに、伊藤さんが印象強く入ってきたのは、戦前の軽井沢での室生犀星先生のお宅へ、散歩の途中、頻繁に出入りしていた時で、先生はじめ、室生家の人々が、「イトウシン」の愛稱で、東京大森の室生邸の留守番をしている、伊藤さんの噂が出てくるからだった。

室生さんは、身近に顔を出すお弟子たちに、独特のユーモラスな渾名をつけて呼ぶ、奇妙な道楽があり、堀辰雄は「タツチャンコ」であり、津村信夫は「ノブスケ」であり、立原通達は「ドージー」だった。優雅な堀さんは東北あたりの土俗的な人形になり、重厚な津村さんは尻はしよりの足軽に似てくるし、長身瘦躯の道造さんは、銅像のように重い金属的風貌を帯びるのだった。実物と渾名とは、そのようにして辛妹無双の犀星先生の口にかかると、対照の妙を極めて滑稽感に包まれることになる。伊藤さんの「イトーシン」も、アーキストの軽捷な存在が、どこかの信用金庫を思わせる。重厚で勤直な姿に生まれ変わって、私

を感心させた。私に至っては、「中村シンジロー」で、一郎が次郎と変わっただけで、野暮な大学生の私は、ある踊り子と心中して、天下に艶名を馳せた、天才で美男のピアニスト中村信次郎と二重写しにされてしまった。

犀星先生の女性美に対する鑑賞眼の異常な詩人的敏感さは有名であり、車内が女性たちの花咲く花壇に変貌して、息が詰まるので、電車に乗れないという域に達していて、しかし、美人は美人で、ブスはブスですよ、と反問した私などは、大いに軽蔑された。その老先生の女性美礼讃の面の、最も忠実な継承者が伊藤さんだった。

伊藤さんは山の上ホテルに籠もって仕事をする時、部屋の間で美人に琴を弾かせ、それで昼寝を試みるというのが評判で、私はその詩人的贅沢さに驚嘆したものだ。

又、ある時、金沢の街で、ばったり出会うと、この有名な偏食家は、私の顔を見るや否や、助かったという表情で、「トンカツ」を食べに行こうと提案した。料理の見事さで、天下に聞こえている、この北国随一の、百万石のご城下だが、三食ごとの凝った金沢料理に、いささか食傷していた私も、伊藤さんに同意して、五木寛之家に電話を入れ、行きつけのトンカツ屋を訊いて、心置きなく舌鼓をうつことができた。

しかし、袂を分かってから、伊藤さんは何のためか、盛りのキャバレーの看板に、ある流行女性歌手

の大きな顔写真を発見して、伊藤さんがご執心のこの歌手の歌を聞くために、彼女の後を追って遙々ここまで来たのかと感心した。伊藤さんはこのゴイキの歌手を応援するために、その年の紅白歌合戦の審査委員に立候補したと噂されていた。伊藤さんの思いつきが、屢々奇想天外であり、さすが天成の詩人であると、私を敬服させることが多かったが、ある時、部屋探しのお供を命ぜられて、一日じゅう千駄ヶ谷あたりのマンション巡りの案内をした。しかし、結局、庭付きの部屋はマンションでは無理だということになった。

なぜ、庭がないと駄目なのですかと、尋ねると、伊藤さんのところへ、全国から贈られてくる膨大な詩人たちの詩集を、部屋に置ききれないので、街に散逸させるのは作者に失礼だとして、庭に穴を掘って大地に帰すのだというご意見だった。

この宇宙的に壮大な詩人的幻想はまことに感嘆すべきものがあつたが、平凡な常識からすれば、巷に放出して多くの人の目に触れる方が、作者の望みにかなうのではと考えた。

しかし、伊藤さんの詩人的発想はそれを許さないのだった。



土屋文明と群馬の精神風土

中村 稔

アララギが本年末で廃刊することになったと伝えられ、話題になっているが、土屋文明という存在がなかったなら、戦後はおろか、昭和初期にとうにアララギは消滅していただろう。文明の死とともにアララギはその存在意義を失ったのだ、それほどに文明は偉大だったと私は考えている。

埼玉で生まれ育った私は、隣り合った県なのに群馬はどうしてこんなにも精神風土が埼玉と違うのか、と感じることが多い。たとえば国定忠治、大前田英五郎といった知られた博徒は群馬に集中し、埼玉には名ある博徒はいない。博徒が力をもつのは幕藩体制下、天領、旗本領のような行政不在の治安の悪い地域であること、かつ、養蚕、機業といった産業によって現金収入があること、二つが条件だが、埼玉も群馬と同じくこれらの条件を満たしているのに、埼玉には群馬のような目立った博徒が出なかったのは何故か、私はかねて疑問に思っている。

詩人についても同じである。萩原朔太郎、山村暮鳥、大手拓次、萩原恭次郎、高橋元吉、伊藤信吉ら群馬の詩人たちは眩しいほどだし、歌人として土屋文明、吉野秀雄、俳人として村上鬼城、長

谷川零余子らを想起すると、隣り合った埼玉が生んだ詩人、歌人、俳人の貧しさを私としては嘆かざるをえない。もつと視野をひろげると内村鑑三、新島襄、高島素之といった人々も群馬の出身である。埼玉が誇るに足る偉人は近代では、渋沢榮一ただひとり、現代の俳人は金子兜太だけということとを考えると、群馬の精神風土は埼玉とはよほど違っているように思われる。

思いつくままに挙げた上記の人々はそれぞれ個性が強く、個性が違うから、共通の精神的基盤をみつけようとすることは危いことだが、萩原朔太郎の詩に、「国定忠治の墓」があることから分かるとおろし、朔太郎はあきらかに忠治との間に精神的紐帯を感じていた。反俗的、反体制的ということ、ここにあげた多くの人々に共通しているようにみえる。大手拓次は日常的には会社員として平凡な生活をおくったが、内面では社会に背を向けて詩の密室に閉じこもって独自の美を紡いでいたといつてよいだろう。村上鬼城の反俗的な牙はむしろ痛々しいほどであり、萩原恭次郎の反体制的活動はいままでもない。それに、これらの人々に共通することは、内村、新島らを含めて、純真であり情熱的だということである。

一見したところ、土屋文明はこれらの人々に比べ、反俗的でもなく、反体制的でもない。アララギという我が国最大の短歌結社の総帥として、実際のであり、世俗的でもある。だが、文明は真正、昭和の歌壇においてもっとも前衛的であった。文

明の前のアララギの指導者島木赤彦の鍛練道としての歌作といった袋小路から、我が国社会の現実

に眼をひらき、私たちの生活の現実から詩をくみあげることによって、豊かな歌境の展望を与えたのであった。その歌境とは

吾が見るは鶴見埋立地の一隅ながらほしい
ままなり機械力専制は
などを含む『山谷集』所収の「鶴見臨海鉄道」の連作は勿論だが、そうした社会的現実を主題としてとりあげたことだけにあるわけではない。

ただひとり吾より貧しき友なりき金のことに
交絶まじはりてり
吾がもてる貧しきものの卑しさを是の人に
見て堪へがたかりき

の如き『往還集』所収の作にみられるような、残酷なまでの人間疑視、

歳旦をしたり顔なる俳譜師それよりげすの歌
よみわれは

の如き『青南集』所収の作にみられる自己批判等、土屋文明はつねに短歌の前衛とし渾身の情熱を傾けて未知の暗黒に挑み、短歌の現代性を獲得したのである。そうした前衛性においてこれまであげた群馬の人々と共通の精神風土に培われたのだという感がふかいのである。



伊藤信吉先生のこと

萩原葉子

私が同人雑誌「青い花」に父の思い出を連載するようになった頃のことである。離婚後、人生に行き暮れストレイ・シープの状態であった。

室生犀星から突然ハガキが来て「良く書いてい」と、賞めてくれ「遊びに來なさい」と、あった。賞めてくれたのは、うれしいが家へ行くなど一人では死んでも出来なかった。子供の時、家が近く父に連れられ、遊びに行つたことがあつたが父の死後は、ずっとごぶさたしてしたのである。

父の晩年（と、言つても今日考えると四十五歳から五十五歳で、まだ若い青年の筈であつたが、老人のように見えたものである。）小田急「世田谷中原」駅（今日世田谷代田）から五、六分の借地に家を建て住んだ。昭和七年で私の小学校六年から二十一歳までの時である。

その頃、三好達治、室生犀星の初めいろいろの来客があり、伊藤氏も來られた。私は玄關に足音が聞こえると、猫のように子供部屋に隠れ、息をひそめたが特に室生氏の時は、ベットにもぐり、ふるえていた。そんな私が家に行くなど、足が突っ張り身体が氷のように固まつてしまふ。進退に

窮し地獄へ落ちる思いだつた。困つた末伊藤氏に相談すると「一緒に行ってあげる」と、心安く言つてくれ山道の遭難から救出されたほど、うれしかった。

伊藤氏と、どこで落ち合い室生家に無事辿り着いたかの細かいことは、忘れたが、子供の時見た日本庭園ふうの石灯笼や石佛が、きちんと置いてある庭の飛石伝いに緊張の限り歩いてた。伊藤氏だけが唯一の頼りであつた。

障子の四角な窓ガラスに、四角っぽい横顔を見せていた犀星は、縁側に立つて向かえてくれ、「葉ちゃん、よく來た」と、言つた。私は忽ち子供の時の素直な自分に戻り、気が楽になり、必用以上の心配から解放された。今日思うと伊藤氏の一言が無ければ、永遠に室生家へは行かずじまいになり、犀星とも会わずじまいになつていたのであると思う。

室生家の茶の間には、顔見知りの人や年輩の女流作家が何人か先客で、お茶を飲んでた。それ以来、一人でも行けるようになったが、或る日呼ばれて行くと「一冊の本になったら出版記念会をやりなさい。わたしが父親代わりになる」と、言つた。世間知らずの私は、ひとまかせの状態に進められ当日が來た。伊藤氏は「流し」をお祝いに呼んでくれ初めての本の出版記念会は盛會に終わった。

父親代わりと、流しのおかげで思いも寄らない幸せな、ひとときを得たのだつた。おかげで一

明ければシンデレラの喩のように、マスコミから注文が來るようになり、原稿料と言うものをもらい、プロの雑誌や新聞にエッセイや小説を書くようになったのである。

伊藤信吉氏は、朔太郎研究者として地味に研究を続け、詩集の編集その他にも力を入れ、自身の詩集、その他の出版と並行しながら、エネルギーに活躍を続けている。

父の死後、親類の悪企みで私に著作権が無いように手を打ち、没後に小学館から出た全集は元より、戦後ぼつぼつ出初めた詩集などの版權を横取りされ、裸一貫で嫁に出された。父と親しかつた三好達治が、親類と長年に亘り戦つてくれ、ようやくのことで版權が來るよう正しく軌道を修正してくれた。それを機に伊藤氏は完全な朔太郎全集を筑摩書房からだしてくれと言ひ、資料集めや研究の初歩から身を呈してまとめてくれた。ありがたい恩人であつたのだ。

先日「監獄裏の詩人たち」「新潮社」刊の出版記念会と、満九十歳のお祝いの会で、ますますのエネルギーシユな姿を見せ、来客達に勇気を与えていたのが、眼に焼きついている。

平成九年五月



父のふるわしの地に

小市 草子
かやこ

雲のかなた父がふるさとありと言へど

子供は余り感ぜざるらし

右は、父の第二歌集「往還集」所載の「伊香保榛名」と題する連作の中の歌で、「かはるがはる幼き二人おぶひつつ登る峠に夏雲雀なく」の歌と共に、私の愛唱してやまない一首です。昭和三年八月の作ですから、父はまだ三十八歳、六歳の兄とようやく五歳になるうとする私をつれて、伊香保から榛名へ登った夏のことでした。榛名の山道に足をとどめ、雲のかなたを指さして子供達に話しかけている父の姿が目につかびます。そちらの方を一所懸命見ながら、父のふるさとが上郊村保渡田であることも、ましてやふるさとの空を望んで立ちつくしている父の懐いなど知る筈もない幼い二人でした。後年、学校に上がるようになって、通信簿に記入された本籍地、上郊村保渡田の字面がだんだんはつきりと頭に入るようになりました。しかし、上郊村保渡田は私達兄妹にとって、まだはるかに遠い、縁の浅いところでした。

昭和三十二年には、町村合併で上郊村は群馬町の中に入り、その名称は父が通った上郊小学校に

のみ残ることになりました。父は、「村の名といへど百年たもたぬかなくなりてゆく群馬郡上郊村」（青南集）と詠んでその感慨を歌っています。

長い時間が過ぎ、父の晩年になって、初めて保渡田との出会いがあったのだと言えます。足が弱り家に籠るようになってからは、とりわけ生まれの村を懐かしむ日常で、私達にも思い出すままに繰り返して聞かせる父でした。毎日の父の話から、保渡田が急に身近になったばかりではありません。長生きをしたお陰で、昭和六十三年には名誉市民の称号を贈られ、その折を初めとして、父に代わり私達で保渡田に行くことが多くなりました。

何十年ぶりに訪れた保渡田は、今まで持っていたイメージとはまるで違った明るい開けた農村でした。牛舎こそあれ、赤や青の屋根瓦が日に光って、東京の郊外を思わせるような感じでした。思っていたより山が遠く、「青き上に榛名を永久の……」を実感しました。

その保渡田に県立の文明記念文学館が建つことになったのです。実は、何事にも大げさな派手なこと嫌いだっただ父の心を思い、私達がひそかに願っていたのは、本当にささやかなものでしたから、思いがけなく立派な館建設の構想を知り、とまどう気持ちでした。しかし、県と町の尽力で五年の歳月をかけて出来上がった館は、まことに目を見張るばかりの、古墳をイメージした、それについて近代的な明るさとやさしさを備えた素晴らしきものでした。

開館式に招かれた席で、私は館建設のために尽くしてくださった多くの方達のことを思っていました。そこにはさまざまの出会いがありました。父を介在としてその出会いに支えられてやって来たことを思っていました。

開館後も、何度も館を尋ねる機会に恵まれている私ですが、館が募集したボランティアの方達との新しい出会いもうれしいことの一つです。「記念文学館がこの保渡田に出来、これは私達の生きがいになっていきます。」と言われた方もありました。五十数年前、吾妻郡原町川戸（現吾妻町に疎開することになり、疎開と同時に、町の女学校、県立吾妻高等女学校に勤務することが決まった私に、地方は文化がまだまだ遅れているのではないかと、つくづくと言っていた父の声がよみ返ってきます。今、父ばかりでなく母のふるさとでもある「保渡田」が、地方文化の拠点となり、新しい時代に向かって、新しい活動を始めていることを、父はきっと喜んでいるにちがいないと、思います。



文学館で会いましょう

荒川洋治

土屋文明記念文学館に行つて、よかつたと思う。ひとつは、立体化された「短歌の世界」に出会えたからである。さほど大きくない透明な角柱のなかに、たとえば山部赤人が、お人形さんになって、春の野原の草のうえに、ねそべる。そのかたわらには「春の野原」の一首が揚げられているのだ。この他、

桜の花の下でくつろぐ西行

海辺で「白鳥」をみる若山牧水

など。古今さまざまな歌の世界がひとつひとつ、色合いも形もリアルに造形されている。夢を見たような気分になるいっぽう、作歌の状況もまるでその場に立つように、身近に感じられたのである。文学作品はあまり説明してはならない。懷中で個々に想像し楽しみ、味わうものだときかされてきたが、そうでもないと思った。詩でもこのような「立体」が可能かもしれない。

サンマを焼く佐藤春夫

遠いふるさとに思いを馳せる室生犀星

雨の品川駅に立つ中野重治

娘と夕食をとる黒田三郎

なんて。平面ではなく立体だからこそ見えてく

る世界がある。この新鮮な造物には文学作品を樂しむための、数々のヒントがかくされているように思われた。

集会室がいっぱいあるのもうれしかった。文学館は次代をになう若い人たちに特に利用してほしいが、みんなで集まったり、話を聞いたりする空間が意外に設けられていないものである。小説や詩歌はどちらかといえばこっそり愉しむもの。自分の部屋とか、下宿とかの個室がそうするのにちばんあつてはいるのだけれど、「オッホン。では始めます」などと、ちよつとあらたまつて集いをひらくのもいい。ぼくは今度みんなで使わせてもらおうと思ひ、貪欲に、どの部屋ものぞいて回つたことである。

まだある。亡くなった人だけではなく、いま現在活躍中の人もたいせつに扱われていることだ。展示室に、詩人の崔華國さん（崔さんは展示の翌年一九九七年三月に亡くなった）のコーナーがあつたのでうれしくなつた。坂東の土地を愛した人だ。いい詩を残した人である。

文学館の展示は、故人に限るところが多い。文学の評価は死後さだまるのが原則だからいたしかたないが、歴史だけではなく現在の息吹も伝える同館の姿勢は正しいと思う。

特に詩歌をつくる人の場合は生前、評価において恵まれないことが多い。もし、自分の著作が展示されていたりすると、それをみながら、ああ、わたしももうひとつふんばりがんばつてみよう、い

い仕事をしていこうと励みになる。それってたいせつなことだと思ふ。

もちろん度が過ぎて、慢心させる？ことがあつてはならないけれど、この町で生まれてこんな活動をしている人がいるのだと、来館の人たちに知ってもらふのはいいこと。同人詩歌誌の展示、保存も役に立つ。故人の顕彰だけではなく、いま同じ時代を生きている人たちどうしの出会いが深まるところに、文学館の意義があるとぼくは思う。

最後に。ぼくのもとにはこのような文学館の「館報」が六紙ほど送られてくる。それぞれ貴重な読み物がのつているので愛読している。だがそのうちの五紙が、ひとつのことを書き落としておこつたに気づいた。その号の発行年月日は記されているのに二号以降は創刊年月日が記されていないのだ。また開・閉館時刻、休館日も記されていない。館報はそういうものなのかもしれないが、通いつけていない人には不便である。片隅にでも毎号のせていただくとう助かる。

これからも、はじめての人に喜ばれる建物であつてほしい。



啄木の日記から

司修

石川啄木が亡くなる数日前の日記を読んでみます。

「ともかくもこの二日間は穏やかに過ぎたといふものだ。今日は殊に朝から気分がよかつたので、思ひ切つてひと月振りに湯に行った。」

入浴料は当時二銭です。目薬が十銭。レコード一円二十五銭。煙草五銭。納豆三銭です。二銭の金が簡単に使えなかつたのか、三十八度になる結核の熱が湯を遠ざけていたのかわかりません。一と月も銭湯に行かなかつたという事は、熱よりも金がなかつたと考えるのが妥当でしょう。前年の明治四十四年の日記に、切実なる短歌を一首だけ書いています。

今も猶やまひ癒えずと告げてやる文さへ書かず
深きかなしみに

翌年の四月十三日に他界するのを啄木は知っていたのでしようか。妻も容態悪く、母も病気で倒れ、薬も満足に飲めなかつたのです。一家の困窮をみかねて父は再び家出をしました。暮には一子京子ちゃんが肺炎になり、啄木の家にいる人間はすべて病人になつてしまいました。一ヶ月ぶりの風呂に入った啄木は、その二十三日に咯血した母が結核三期だと知つて絶望の底に落とされます。妻のそれも、子どものそれも、自らのそれも死の病である結核だったので。三月には母が死に、

啄木は薬も飲めずに死の病におかされていきます。土岐善麻呂が二十円、金田一京助が十円病床に届けましたが、四月十三日、若山牧水と妻と、呼び寄せられた父との三人に見守られてさびしく死にました。

今の世に考えられない貧困生活です。山谷や釜崎の実状は知りませんが、新宿の段ボール箱生活者は見えています。箱に絵を描いたりして、生活の余裕を見せています。昼間からスコッチの瓶を口飲みしている人たちも見られます。貧困の末というより、世を捨てた、あるいは仕事をするのが嫌いという感じがつきまといまいます。

日記の続きを読みます。
「札を二枚買つて（背中を）流させたが、ひどい垢だつた。熱い湯につかつて、湯槽のふちに項をのせて、静かに深呼吸をしていると、何だか自分のからだに病気のあるといふのが嘘のやうに思われた。それほど気持ちよかつた。」

飾りのない塵のような幸福の瞬間が語られています。こんなにあたりまえで素朴な表現はありません。しかしぼくの現在の生活の周辺からしたらどこにも見つからない言葉であり情景です。飢えもなくこれといった病気もなく、争いもなく、漫画チックに進行するサリン事件の裁判を新聞記事で読みながら、首謀者に腹を立て、弁護士に腹を立て、しかし忘れていくであろう何かに腹を立てず日を過ごしています。

「午後には、しかし、熱がまた三十八度まで出たので、うるたへてピラミドンをのんで、夕方までちっとして寝ていた。（略）私の心には久しぶりに平和があつた」

ピラミドンとはバファリンみたいなものです。優れた詩人に対して神は生きる手をさしのべなかつた。啄木はローマ字日記に、神よ命を取る前にいくばくかのお金をくださいというユーモラスな言葉を残しています。

あたらしき背広など着て
旅をせむ

しかく今年も思ひ過ぎたる

啄木の歌に貪乏神の姿がちらりとぞくのは当然です。この歌を読んで思い出す詩があります。啄木とは正反対な坊ちゃん育ちの朔太郎の「旅上」です。

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりも達し

せめては新しき背広をきて

きままなる旅にいでてみん。

これはたぶん啄木の歌が先にあつたのでしよう。朔太郎は父に「飼ひ殺にしてやる」とまでいわれます。それもまた大いなる苦しみを生みました。

朔太郎の「鉄橋橋下」を読んでみます。

人のにくしといふことば／われの哀しといふことば／

き／きのふ始めておぼえけり／この市の人になれば／われを指さしあざけるか／生まれしものはてんねんに／そのさびしさを守るのみ／母のいかりの烈しき日／あやしくもさけび哀しみて／鉄橋の下を歩むなり／夕日にそむきわれひとり

大正三年三月二十四日上毛新聞に掲載された詩です。

この原稿を書き終えた翌朝、ぼくの体はだるく、熱を計ると三十七度五分ありました。啄木の熱の気分がよくわかりました。

開館までの歩み

詩人、歌人、俳人、小説家、数多くの文学者を生み、文学的風土の色彩の濃い群馬においては、早くから文芸団体や研究者の間から近代文学館の設立を求める声があがっていた。行政の側においても県立文学館の建設の研究や既設の記念館のネットワーク化の中核施設の必要性などの検討がなされていた。

しかし文学館を造るうにも、建築物はお金さえ都合がつけば出来るが文学資料はそうはいかず、収集物は皆無に等しい状況にあった。

折しも、名誉県民である歌人土屋文明の逝去に

伴い遺族より関係資料一括を寄贈の申し出があり、文学館建設の構想が一举に進展することとなった。土屋文明の人柄を察すれば、大げさでなく地味で小さな記念館ということになるであろうが、折角県立として造るのであれば、資料の収集保存、公開など部分的であっても近代文学館の機能も併せた方がより郷土の偉人を顕彰することになるということで本館の構想が具体化した。

見せ物小屋にしない、本物を公開する、気持ちの落ち着くところとする、このような設計コンセプトをもって開設の準備がはじまった。

- 1988 (S63). 4 県教委で近代文学資料の調査開始
- 1990 (H2). 12 土屋文明死去
- 1991 (H3). 7 遺族より土屋文明資料の寄付申込み
- 7 生涯学習センター内に土屋文明資料展示室設置
- 11 群馬町から県に「土屋文明記念館」建設の陳情
- 1992 (H4). 4 群馬町に記念文学館建設調整室設置
- 1993 (H5). 1 建設推進委員会設置 (委員 9 名)
- 1 建築設計プロポーザル
- 3 展示企画提案審査会で設計者の選考
- 3 館建設基本構想策定
- 4 県教委に建設準備係設置
- 4 資料収集始まる
- 日根野資料寄贈
- 伊藤信吉資料寄贈
- 7 展示基本計画終了
- 1994 (H6). 2 都市計画公園事業の大臣認可
- 3 建築実施設計
- 2 展示基本設計終了
- 4 文学資料整理作業室を県図書館内に設置
- 6 阿部資料寄贈
- 7 石田資料寄贈
- 10 大手拓次資料寄贈
- 10 展示実施設計終了
- 12 上毛野はにわの里公園占用許可
- 12 群馬町と土地使用貸借契約
- 12 建築工事開始
- 1995 (H7). 3 文学資料情報管理システム基本設計終了
- 10 館ボランティア募集開始
- 10 レストランテナント募集
- 10 周辺整備工事
- 12 建築工事終了
- 1996 (H8). 1 ボランティア養成講座開始
- 1 建物引渡
- 2 文学資料の移送搬入
- 3 展示工事完了
- 3 文学資料情報管理システム詳細設計終了
- 4 土屋文明記念文学館組織発足
- 設置管理条例
- 7 伊藤信吾初代館長就任
- 7 開館

